

## はじめに

尋ねられて「魚の研究をしている」と言うと、多くの方が海の魚を想像して、鯛や鮒など美味しい魚が食べられていいですね、という反応が返ってくることは少なくない。いえ、鮒とか鯉とかの淡水魚です、と答えると口には出さないものの、それはまた地味な研究を……といったような怪訝な顔をされることも、やはり定番である。実際には、たとえば寒鮒（寒い時期のフナ）の刺身などは海水魚とは違った旨味を持っており絶品なのであるが、アユやニホンウナギなどの特別な淡水魚を除き、本邦において淡水魚の存在感はあまり大きくない。くわえてアユやニホンウナギが淡水魚かと言われば、本文でも説明するように、狭義の淡水魚、純淡水魚ではない。そんな地味な淡水魚であるが、少なく見積もっても本邦だけでも100人以上の研究者がいる。それはなぜか。「生物多様性」ひいては「多様性」を哲学する上での研究対象として、興味深いからである。多様な生物が生きているこの世界にはどんな意味があるのか、生物多様性やそれを構成する各種の生物にはなぜ価値があるのか、そもそも多様性とは何なのか。

多様性は、身近な場所にも眠っている。いや眠っているどころか、世界はもはや多様性で構成されているとも言えよう。海外に出来ばさまざまな言語に出くわし、日本の中でさえ地方に赴けば聞きなれない方言に悩まされる。人気アニメを見れば、たいてい無数のキャラクターたちがその魅力を好き放題に放っている。レストランにいけば美味そうな数多くのメニューに目移りし、コーヒー一杯飲

むにしてもキリマンジャロだブルマンだと講釈を垂れるはめになる。淡水魚を研究するにしても、やはり多様性から逃げることはできない。たとえば「銀色の魚が川で捕れた」ではお話にはならない。どの魚種が川のどんな場所で捕れたのか、そしてその個体はオスなのかメスなのか、捕れたのは夏なのか冬なのか昼なのか夜なのか、多様性の雲の中から一つひとつ情報を取り出す必要がある。生物多様性とは単に多種多様な生き物がいることではない。その多種多様なるものに直接的にも間接的にも関連する森羅万象をすべて酌んでこそ、生物多様性はより立体的なものとして、より興味深いものとして現れてくる。

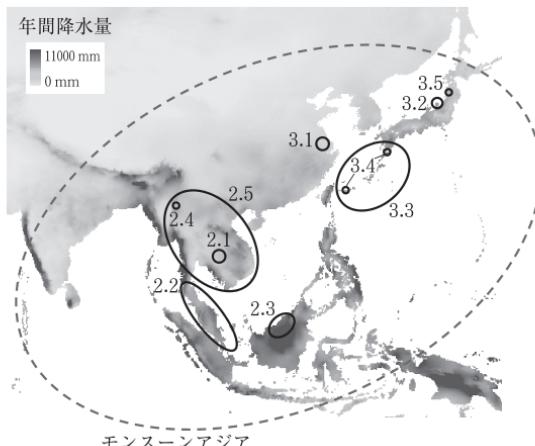
どんな生物でも多様性研究の対象にはなるが、淡水魚には多様性に関する1つの大きな特徴がある。それは本文でも詳しく説明するが、地域性と密接に関係しているということである。いわば淡水魚はその地域性の1つのメタファーであり、象徴とも言えよう。今、世界では多くの自然環境や野生生物がその健全な存続を危ぶまれている。その中でも陸水生態系は、特に危機的である。その理由の1つは、人にとっても生物にとっても「水」は生命の源であり、どうしてもそこへ人間と野生生物との間で競合や干渉が生じるからであろう。さらに、陸地すべてにおける人間活動の影響が、水という媒体を介して河川や湖沼に集められ、河川や湖沼の生態系の変化として現れてくるという理由もあるだろう。陸水生態系というと河川や水路などの線的なイメージ、もしくは湖沼など限定された範囲を想像しがちであるが、「流域」や「集水域」という水文学的概念からもわかるように、もはや雨の降るすべての陸地は、たとえそこに水はなくとも、広義の陸水生態系と考えてよい。逆に言えば、淡水環境を知ること、特に淡水環境の象徴的な生物である淡水魚を知ることで、その地域の陸上のさまざまな様相が見えてくる。海に囲まれ

た島国である日本では淡水魚と人々との関わりは近年少なくなったが、大陸を中心となるアジアのほとんどの地域では、それこそ日本人にとって海水魚がそうであるように、淡水魚は食文化の中心を担っている。アジアにおいて淡水魚はもっとも人間との関わりが深い野生生物の1つであり、陸水生態系ひいては地域全体の生態系を考える上で何よりの研究対象である。アジア各地の淡水魚を知ることは、広くその土地土地の自然環境、そして人々の暮らしや文化を知ることに他ならない。

アジアの中でも東南アジアと東アジアは広くモンスーンの影響を受けている。モンスーンは全体に湿潤な気候をもたらすため、水に生きる淡水魚類とも深く結びついている。筆者は20年間に渡り、このモンスーンアジア地域で淡水魚類の多様性や生態に関するフィールドワークを続けてきた。ときには重い感染症にかかり、ときには深い渓谷の中で一人遭難しかけ、ときには正体不明の蛇に噛まれ、ときにはホテルで寝ている間に窃盗に入れられ、さまざまなりスクと向き合いながらも、まさに魚がいるその現場を五感で感じることにこだわってきた。そしてそれらのリスクを大きく超える何かを得ることができた。その「何か」を言語化することはなかなか難しい。現場はどこまでいっても現場であり、それを文字や写真によって完全に代替することはできない。真に現場を知るためにには、やはり現場に赴くしか方法はない。それでもなんとか本書では、筆者がモンスーンアジアで見てきた淡水魚類多様性と彼らを取り巻く状況を、できるだけ現場に即した形で紹介したい。私の得た「何か」についてその片鱗だけでも読者の皆さんに感じていただけたらと思う。第1章では、モンスーンアジアの淡水魚類多様性をより深く理解する上での予備知識を解説するが、読み飛ばしていただいて構わない。第2章と第3章では図に示すように、筆者にとって特に興

味深かった10の現場について、さまざまな魚たちの紹介も交えながら具体的に解説する。

どのような方がこの本に目を通しているかは、筆者には想像がつかない。熱帯魚ファンや同業の魚類学者・生態学者は少なくともいるだろう。中には、将来は魚に携わる職業につきたいと思っている若者もいるかもしれない。魚や自然になんか興味はないけれど何の気なしに読んでいる方もおられるかもしれない。しかし、そのほとんどの方がおそらく今、エアコンの利いた部屋や電車の中で本書を手に取っていることだけは想像に難くない。本書を半分でも読んだところでゴミ箱にでも放り込んでいただき、タモ網を持って野外の現場に飛び出していただければ、いよいよパスポートを握りしめてアジアのフィールドに飛び出していただければ、筆者にとってこの本を書いた何よりの収穫である。



モンスーンアジアと本書で扱うフィールド

本書では東南アジアの5地域、東アジアの5地域における淡水魚多様性とそれを取り巻く環境について紹介する。